

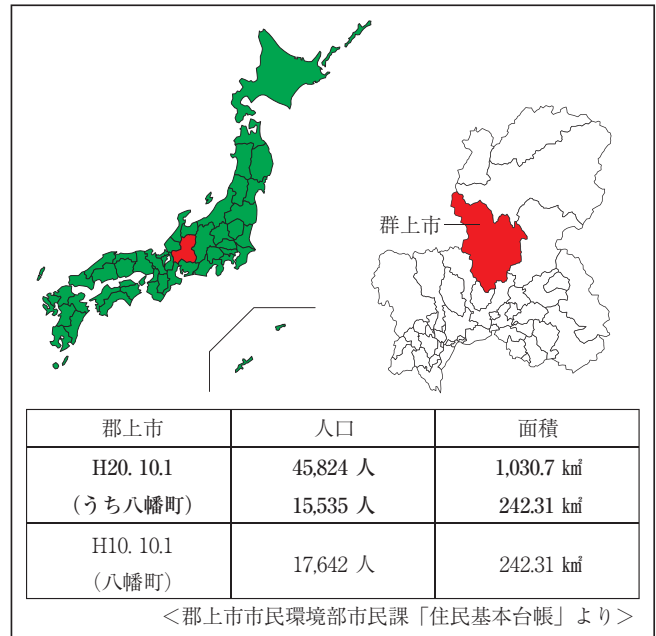
7. 郡上八幡（岐阜県郡上市）

社会

「郡上八幡」と呼び親しまれているが、正式名称は郡上市八幡町である。郡上市は、岐阜県のほぼ中央部に位置し、東は下呂市、北は高山市、西は関市、福井県大野市、南は美濃市、関市に面している。平成16年3月1日、郡上市は旧郡上郡7町村（八幡町、大和町、白鳥町、高鷲村、美並村、明宝村、和良村）が合併し、岐阜県で19番目の市として誕生した。

永禄2年（1559年）、東殿山の戦いで東氏を滅ぼした遠藤盛数が八幡山に城を築き、その城下町として郡上八幡がつけられた。承応元年（1652年）の大火をきっかけに築かれた水路は、防火用水だけでなく生活用水としても利用され、独特の水利用システムが築き上げられた。

特産物としては、郡上本染、郡上鮎、郡上紬などがあげられる。



自然

郡上市内には、長良川や吉田川など24本の一級河川が流れている。特に長良川は、郡上市高鷲町の大日ヶ岳を源流として山間部を南流し、支流である白鳥町の曾部地川や牛道川など、また八幡町の吉田川や亀尾島川などと合流する。白鳥町から八幡町までの流れは比較的緩やかで、河川平野が広がっている。八幡町から美濃市までは郡上川とも呼ばれ、川は峡谷状になっている。特に八幡町中山や美並町三戸などの付近は郡上峡谷ともいわれ、長い年月の浸食によって深いV字形の谷になっている。

郡上市内の約9割は森林（92,692ha）に覆われ、そのほとんどが民有林（90,176ha）である。

白山国立公園には、国の特別天然記念物に指定された樹齢約1,800年の「いとしろ大杉」があり、また郡上市高鷲町のひるがの高原には、ミズバショウ群生地が広がり貴重な植生が見られる。

気候

郡上市は、最も海拔の低い美並町木尾が110m、最も高い白鳥町銚子ヶ峰が1,810mと高低差が大きい地勢であることから、気候にもその影響が大きく表れる。北部の気候は、白山山系に連なる寒冷地域に属するため気温が低く降雪量も多いが、南部の気候は温和で降雪量も少ない。

気候は、年平均気温が12.3℃と穏やかであるが、湿気を含んだ南東の季節風が越美山脈に吹きつけるため、降水量が年間2,682.2mmと多雨である。特に八幡町は、明治26年（1893年）8月22日に日最大雨量607.3mmの記録を残している。

風土

郡上八幡には、室町時代の領主東常縁が古今和歌集の奥義を連歌師の宗祇に伝えるため、歌を詠み合ったと伝えられる泉は、「宗祇水」と呼ばれ、「名水百選」に指定されている。また町の中央を流れる吉田川では、子ども達が飛び込んだり、泳いだりする川遊びが、「残したい「日本の音風景 100 選」」に選ばれている。

郡上八幡には、独特の水の文化として創りあげられた水舟、堰板、カワドと呼ばれる水利用システムが、今でも大切に受け継がれている。

文化

毎年1月6日、白鳥地域の長滝白山神社で行われる「六日祭」では、国の重要無形民俗文化財に指定されている遊宴芸能の「長滝の延年」が奉納される。寿命を延ばすという意味を持つ「延年」は、長滝一山の人々によって受け継がれている「長滝の延年」であり、平泉の「毛越寺の延年」と並んで貴重とされている。

7月に約30夜にわたって踊り続けられる「郡上おどり」は、400余年の伝統を持つおどり文化であり、そのルーツは白山信仰の神事芸能の「ばしょ踊り」といわれている。この「郡上おどり」は、日本三大民踊の一つとして、国の重要無形民族文化財に指定されている。



凡例

山間エリア	谷・盆地エリア	分水嶺	河川	河川景観
鉄道	高速道路	国道	山	山並み
自然公園	田圃、群生地等、大規模開発地等			歴史・伝統文化的要素、その他の拠点等

郡上市の詳細地図* 20

作成にあたって参考にした文献

気象庁 <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php>

「岐阜県景観形成ガイドプラン」 <http://www.pref.gifu.lg.jp/pref/s11654/keikan/guideplan/>

郡上市 <http://www.city.gujo.gifu.jp/index.php>

「郡上市勢要覧 2007」 http://www.city.gujo.gifu.jp/intro/pdf/yoran_2007.pdf

「郡上市地域防災計画」 http://www.city.gujo.gifu.jp/disaster/d_plan.php

郡上八幡観光協会 <http://www.gujohachiman.com/kanko/>

「郡上八幡の水縁空間」 機関誌『水の文化』12号 http://www.mizu.gr.jp/kikanshi/mizu_12/nol2_d01.html

* 20 「岐阜県景観形成ガイドプラン」

取り組みの概要（目的・効果など）

- ・「宗祇水」が「名水百選」に選定され、第一回「全国水環境保全市町村シンポジウム」が郡上八幡で開催されたことをきっかけに、旧八幡町と市民との間で「水をメインにしたまちづくり」に取り組む合意が形成された。また、親水空間整備事業「ポケットパーク構想」等の推進により、まちの中に水とふれあう33の空間が生まれている。
- ・郡上市（旧八幡町）は、町内会の「水舟」の維持費用を補助するなど、市民と一致協力して「水のまち」づくりを積極的に進めてきた。
- ・「婦人会」、「さつきの会」、「いがわと親しむ会」などの住民組織が、「水と暮らす」生活スタイルと文化・方法を継承し、活発に活動しており、各戸の台所排水の浄化など水質保全、水舟、カワド等の管理も行っている。

「感覚環境のまちづくり」から見た特色・魅力

- ・かつては地域に当たり前のものとして自覚されていなかった「豊かな水」という感覚資源が再発見され、その価値が再評価されたことが、新しいまちづくりの出発点となっている。
- ・地方公共団体と市民とが力を合わせ、感覚資源をまちづくりの中心に据えて、地域住民の心の拠り所を作り出した。
- ・外向きの観光施設という視点よりも、地域の生活環境を良くすることを目的に、心地よい水の環境を整えた結果、年間140万人もの観光客を呼び込む効果につながった。

今後の課題・展望

- ・住民の水との関わり方を継承するため、随時ワークショップ等を開催するなど、名水を守る高い問題意識を持続するための工夫が必要である。
- ・公共交通機関を使って都市部からやってくる観光客を想定したアクセス面の整備や、観光客の宿泊・滞在時間をいかに増やすかが観光面からの課題であり、また、1,000軒以上残る古い町家を、まちの固有の景観として守り、観光資源としてどう表現していくかが今後のテーマとして浮上している。
- ・郡上八幡のように、他のまちには存在しない豊かな環境があっても、そのまちの日常生活に溶け込んでしまうと、当事者だけではなかなか気づかないことがある。そのため、他にもそのような事例を探しながら、感覚環境の豊かさを住民と共に発見していくことが、「感覚環境のまちづくり」の課題である。

「感覚環境のまちづくり」を訪ねて-7

名水と暮らすまちづくり

水のまち郡上八幡^{ぐじょうはちまん}

自動車が通るアスファルトの道路。

その端に、サラサラと勢いよく流れる水路があった。

水は透き通り、光り輝いている。

ここは岐阜県郡上市八幡町、通称「郡上八幡」。

家の中からタオルを手に出てきた女性が、家の前を流れる用水にタオルをひたして、ゆすいで絞った。

私が見ていることに気づくと、こちらに向かってにこりと会釈をした。

家の前を流れる水で、何気なくタオルをすすぐ。それがこの町では日常の、当たり前^{あたりまえ}の習慣となっているということが、その身振りからたしかに伝わってきた。

まちを歩くと、「堰板^{せぎいた}」と呼ばれる、用水の流れをせき止めるための板があちこちに置いてあった。

「ほら、この板を縦にして用水に差し入れると、流れがせき止められて水が溜まるでしょ。その水で、洗いものをするんですよ」と、郡上八幡観光協会の案内人の村井誠一さんがやって見せてくれた。

「私も小さい時から、水のことは厳しく親に言われてきました。用水は食べ物と食器を洗うんだから、それ以外のものは流してはいけない、ゴミを捨てたりして汚してはいけない、とね」

目には見えないが、「水を扱う暗黙の社会ルール」とでもいうべき約束事が、この地域にはしっかりと張り巡らされているようだ。

もちろん、水道は100%普及している。だが、郡上八幡の人々は、水道水だけに依存せず、まちを流れる用水を使う、独特の生活スタイルを持ち続けているらしい。それだけ、水が豊富できれいだというところでもあるのだろう。

街中を歩いていると、あちらこちらから水の音が響いてくる。村井さんによれば、郡上八幡には「107ヶ所」の湧水がある、という。

特にその独特な形で目をひくのが、「水舟」だ。

湧水のある場所には、たいていコップが用意されていて自由に水を飲むことができる。ふわりと柔らかく透き通った感触の水だ。郡上八幡には長良川、吉田川、乙姫川の3つの川が流れ、三方を山に囲まれていて、年間総雨量が約2,700ミリ。

「石灰岩を含む傾斜構造のため保水力が高く、いつの季節でも水に満ちています。その水には、ミネラル分が豊富に含まれているんです」

水舟は、段差のある水槽が何段か連なる構造をしている。一番



用水路の水を堰き止める「堰板」



湧水が流れ込む「水舟」

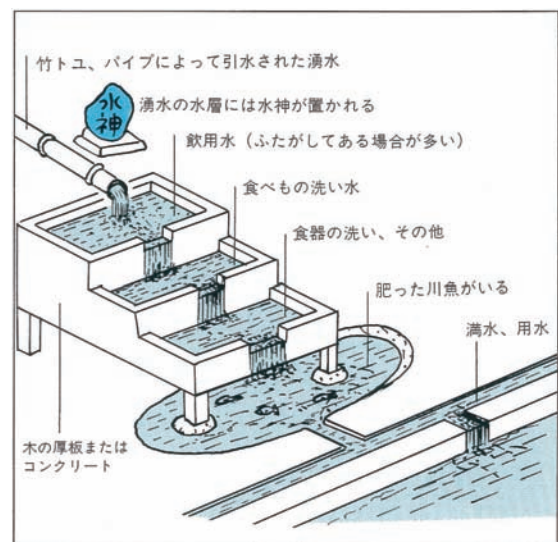
上の水槽は飲料用に、次の水槽はすすぎ、次の水槽は物を冷やしたり下洗いに使うなど、水を丁寧に使い分ける工夫が凝らされているのだ。ご飯つぶなど食べ物の残りはそのまま下の池に流れ、鯉や魚のエサとなり、水は自然に浄化されて川に流れこむ仕組みになっている。

「水舟」の多くは個人宅や商店の敷地内にあるが、町中にも10ヶ所ほどが設置されていて、まち歩きで乾いた観光客のノドをうるおすのに一役買っている。

水舟に、菊の束を手にした女性がやってきた。菊の花を下洗いの水槽に入れて、茎をじゃぶじゃぶ洗っている。これから家の中に飾るのだろうか。この水舟が観光用に見せるためのものではなく、地元住民が毎日の暮らしの中で実際に活用していることが、洗い場の光景を見ているとよくわかる。郡上八幡は、水源補給に優れた地下構造によって、長い間水と親密な関係を結んできた、「水のまち」なのだ。



水舟で菊を洗う女性



水舟のしくみ*21

防火用水から発展した水路

岐阜県の中央部に位置する郡上八幡は、人口1万6千人ほどのまちだ。

そのまちに、観光客が年に140万人もやって来る。

「夏の郡上おどりも有名ですが、通年、観光客がやって来るのは、水を一番喜んでいただいているからだと思います。市街地の中にこれだけ透明度の高い湧水が流れているまちは、他にはないのではないかな、と自負していますよ」と、郡上八幡観光協会の松島浩生事務局長は胸を張る。

全国でも希有な、水と接する生活の形が維持されてきた郡上八幡。

だが、独特の「水のまち」を維持していくには、実はさまざまな苦勞の歴史があった。

永禄2年（1559年）、郡上八幡城が築かれ、碁盤の目のような道や町家による街並みは、このときに出来上がった。承応元年（1652年）、町が大火に見舞われ、全町が焼き尽くされた。その際、第六代藩主の遠藤常友は、4年という歳月をかけて、街路沿いに常時流れる水路を張り巡らした。防火用水として、水路を整備したのだ。当初「防火目的」で作られた水路だが、その後さらに細かい水の道となって、人々の生活の中へと溶け込み、様々に活用されるようになっていった。

用水路、洗い場、カワド（用水路に設けられた洗い場）、井戸、水屋、水舟。

それらは個人あるいは地域で共同利用され、共有して利用する場合は利用組合等がつくられ、清掃

* 21 「水の恵みを活かすまち」

などの管理は、当番を決めて行ってきた。

上流で利用された水は下流に流れ、「町並みの空間に潤い漂わせ、その後は水田などの農業用水に用いられて、再び同じ水路系に還るといふ水循環系を人工的に組み込んだ町である」(渡部一二ほか『水縁空間－郡上八幡からのレポート』)と評される構造を作り上げていった。

江戸時代以降は養蚕・生糸業がさかんで京都への供給地として栄えたが、それを支えたのも水力だった。水力は動力源となり、糸の「繰車くりぐるま」として駆使されたという。日々の暮らしの中では、野菜を洗ったり、洗濯したり、子どもたちの遊び場になったりした。土地の90%以上が山林であるため林業もさかんだが、その木材の運搬方法としても豊富な水をたたえた川が活用されてきた。農業では灌漑用水に、川では漁業が営まれた。

郡上八幡の人々は、水を有効に活用するための様々な工夫を積み重ね、地域で協力し合いながら独自の水利用システムを作り上げてきたのだった。

観光のまちへの転換

「かつては、林業や養蚕が主力産業でしたが、そうした産業が衰退していくと同時に、1970年代頃から「郡上おどり」と「八幡城」と「鍾乳洞」が観光の目玉となって、各地から観光客が訪れるようになりました」と松島氏は振り返る。

「しかし、当時はただあるものを見せているだけで、観光地づくりとしての意図的な政策は何もありませんでした。『郡上おどり』のような歴史的な文化遺産や資源を、いわば食いつぶす一方でした」そんな郡上八幡に、大転換が訪れた。

昭和48～52年(1973～1977年)、多摩美術大学で環境デザインを教える渡部一二教授らが中心となって水環境調査が行なわれた。この調査によって、郡上八幡に残る豊かな「伝統的水利用」施設が、詳細に調べられた。

渡部教授らは、全国の水利用形態を客観的に比較するために、共通のチェック項目による「評価シート」を作成した。項目は40強ある。よいシステム、よい水源を持っている土地は、チェックリストに○がたくさんつくことになる。調査によって、郡上八幡が全国で一番○の多い、いわば最も豊かな水環境を保持しているまちであることが分かったのだった(P.83表4)。

だが、大きな問題があった。

そもそも、郡上八幡の優れた水環境について、当事者である住民たちが無自覚だったのだ。郡上八幡で暮らしている人びとにとって、水は、他者に見せる「観光資源」などではなく、日常の中にある当たり前、単なる生活システムだった。

「このときまで私たちは、水を使う生活なんて昔からあったもので、特に珍しいものだと思っていないし、他のまちでも同じなのではないか、とっていました。外部の人に指摘されて初めて、価値があるのだということを知ったわけです」と松島氏。

調査を通して、郡上八幡には豊富な湧水や河川があるだけでなく、「生活の中に独特な水環境システムが残っている」ということが明らかになっていったが、当初はその価値を指摘されても、住民がすぐに納得できたわけではなかったようだ。

「私が『これは文明的な価値があるものだ』と申し上げても、なかなか地元の人には信じてもらえなかった。そのことが、水環境や優れたシステムを守ろうとすることへの障害にもなっていました。ところが昭和60年(1985年)に八幡が名水百選に選ばれたことで、行政と住民が連帯して、水の一つのテーマにまちづくりが始まったのです」(渡部一二ほか、再掲)

表4 郡上八幡の水利用形態評価シート*22

利用形態		水形態						
分類	利用内容	川水	用水	井水	湧水	池水	温泉・冷泉水	上水道
環境用水	雪流し	●	●			●		
	池への引水		●			●	●	
	散水		●	●	●		●	
	水の音	●	●		●			
防火用水	用水、井水		●	●	●	●		
	貯水池							
生活用水	飲用				●	●		●
	物洗用	●	●	●	●		●	●
	冷却用	●	●	●	●		●	
生産業用水	農業	●	●		●			
	漁業	●				●		
	酒造用				●	●		
	製糸業	●	●					
	染物業	●	●	●				
	洗張業			●				
水辺のリクリエーション	釣り	●	●			●		
	水浴	●						
	観光漁業	●				●		
	水と観光地	●				●	●	
	水辺の休息	●						
	水と祭り	水神祭・川祭	●		●	●	●	
伝説と祭り		●		●	●	●		
水エネルギー装置	精米・精粉	●	●					
	水力発電	●	●					
	揚水水車		●					
水上交通	材木運搬船航路	●						
	流木路	●						
	渡し舟	●						
水と生物	魚	●	●			●		
	水辺の鳥	●				●		
	水生昆虫	●				●		
	水棲天然記念物	●				●		
温泉・冷泉	ラジューム温泉				●			
水と文人・文学	宗祇水（白雲水）と遠歌歌人、飯尾宗祇の歌と伝説、アユと俳人、詩人。	●				●		
水と風俗	湧水と水神、年中合字と水（若水くみ、イブシン、七夕）、漬物とクキナ、魚と調理法、郡上節と水。	●	●	●	●	●		
水と町の構成	町の構成、コミュニティの媒体となっている水。	●	●	●	●		●	

【都市住宅】703号 鹿島出版会1977年

きっかけとなった「名水百選」

小駄良川のほとり、宮ヶ瀬橋の近くから湧き出ている水がある。

水神を祀る社の下、石の間から水が静かに湧き出て、水舟へと流れていく。

郡上八幡で「名水百選」に選ばれ、全国に名を轟かせた「宗祇水」だ。



「名水百選」に選ばれた「宗祇水」

文明3年（1471年）連歌の宗匠・飯尾宗祇^{いとおそうぎ}が、郡上領主の東常縁^{とうのつねより}から古今伝授を受けて京へ戻る時、この泉のほとりで歌を詠み交わしたという歴史から、その名がついた。大正6年（1917年）には有志が集まり、宗祇倶楽部を結成。保存につとめ、のちに宗祇水奉賛会が受け継ぎ、今も周辺の住民により、定期的に清掃が行われている。

昭和60年（1985年）、環境省（当時、環境庁）が実施した「名水百選」。

「当時、『水』というと、汚染問題ばかりが焦点になっていました。そんな状況の中で、ワースト水域の発表だけでなく、全国の美しい水についても調査し、公表していくべきではないかと考えていました。汚染されていく水環境に警鐘を鳴らす必要はありましたが、それ以上に、私たちの暮らしを豊かにしてくれている優れた水環境について、多くの人びとに知ってもらうための情報を発信すべきだと思い、決断しました」と、当時環境庁の水質規制課長として「名水百選」の選定を推進した片山徹氏は立案のきっかけについて語る。

その第一号として、郡上八幡の「宗祇水」が選ばれた。

それは、郡上八幡の住民の意識改革としても、また、新しいまちづくりの流れを作っていくうえでも、大きな転換を促すきっかけとなった。

「名水百選」の選定を受けて、昭和60年（1985年）8月「全国水環境保全市町村シンポジウム」の第一回が、郡上八幡で開催された。

会場は、旧八幡小学校の体育館。全国から名水百選の関係者などが数百名集まり、水環境の保全について議論を交わした。

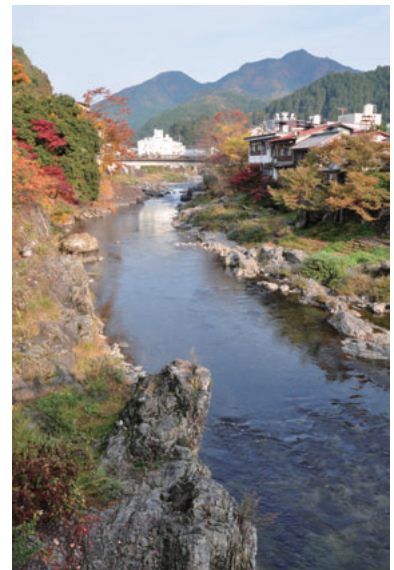
「その時、NHKが取材にやってきて、シンポジウムの取材をしている最中に、すぐ脇を流れていた吉田川で、子どもたちが水遊びをしている様子を撮影して放映したんです。これが全国の視聴者の視覚に訴えたんでしょう。もちろん会議の内容も意味はあるだろうけれど、子どもが川で遊んでいるという風景が、とても懐かしくて、インパクトが強かったようです」と郡上市建設部の可児俊行^{かに}氏は当時を振り返る。

その頃、日本の社会では、経済発展を主眼においた開発によって、全国各地で、伝統的な風景が急激に消えつつあった。そんな中、「水のまち郡上八幡」のイメージが、自然の中で伸び伸びと川遊びをする子どもたちの姿を通して全国に発信され、強い印象を残すことになった。

失われゆく故郷の風景と、経済ばかりが優先されていく開発への疑問。そんな時代状況を背景にしながら、模範に値する優れた水資源の存在を全国に知らせようと選定されたのが、環境省が進めた「名水百選」だった。

今では、郡上八幡を訪れる観光客は、必ずといってよいほど「宗祇水」に立ち寄る。そして訪れた観光客の多くが、用意された柄杓をつかって、宗祇水を口に含んでいく。

社の中を覗くと、今でも「名水百選」に選定された時の表彰状



夏に子どもたちが水遊びをする「吉田川」

が掲げられていた。

水環境を見直す

宗祇水が「名水百選」の第一号に選定され、第一回の「全国水環境保全市町村シンポジウム」が開催されるといった出来事を通じて、「水をメインにしたまちづくり」に取り組んでいこうという合意が、行政と市民の間で盛り上がっていった。

行政サイドも「水とおどりのまち」というキャッチフレーズを掲げ、積極的な取り組みをスタートさせた。

「このまま何もしなければ、水の汚染も進み、水のまちのイメージはなくなる」という渡部教授の警告がだんだんに理解され、市民にも行政サイドにも浸透していった。

水環境について、一つ一つ見直していくことが求められていた。

当時、郡上八幡では、まだ下水道が完備されていなかった。そのため、川に生活雑排水が流れ込んでいた。そこで、水質浄化のための浄化実験や、流し台から生活雑排水を流さないためのペーパーフィルターを無料で配布した。同時に、雑排水を流さないようにするステッカーの配布などの活動も始まった。

市民グループ「さつきの会」が結成され、市民が中心となった水環境保全への動きがはじまり、水への意識が、徐々に高まっていった。

また、車社会の拡大につれて、道路脇の用水路にフタが被されていく傾向が目立っていたが、このころから「できるだけ用水のフタを開けていこう」という運動が盛り上がっていった。

水と人々との関係が、もう一度、問い直され始めた。

軌を一にして、昭和60年（1985年）8月「郡上八幡ポケットパーク構想」がまとまり、ポケットパークづくりがスタートした。

ポケットパークとは、潤いや休憩のために街角などを整備した、比較的小規模な公園空間のことだ。この構想には、住民たちも参加し、生活に密着したポケットパーク案が出され、中には家の横の空き地を提供したい、洗い場を横に広げて小広場にしたい、といった提案も出された。この「ポケットパーク構想」には渡部教授も加わり「借景、水、歴史、踊りの各要素が有機的に空間化した案をつくり委

図6 郡上八幡のポケットパーク

- | | |
|------------------------|------------------------|
| 1. 水車ポケットパーク（愛宕町） | 18. 鮎跳ね床止め（上愛宕町、上桜町） |
| 2. 惣門橋ポケットパーク（上ヶ洞） | 19. 安養寺公園（下柳町） |
| 3. 宗祇水（本町） | 20. 惣門坂（上ヶ洞） |
| 4. 宮が瀬こみち（吉田川沿い） | 21. 職人町歴史的水路（職人町） |
| 5. あじさいの道（柳町） | 22. 博覧館通り（柳町、殿町） |
| 6. 愛宕下道（中愛宕町） | 23. 中河原河川公園（尾崎町） |
| 7. 八幡大橋（上愛宕町、桜町） | 24. 吉田川親水遊歩道（愛宕町） |
| 8. 八幡大橋橋詰ポケットパーク（上愛宕町） | 25. 大手町スポット（大手町） |
| 9. やなか水のこみち（新町、稲荷町） | 26. いがわこみち（常磐町） |
| 10. 枅形ポケットパーク（上枅形町） | 27. 頼山陽公園（穀見） |
| 11. 稲荷町道路修景（稲荷町） | 28. いたち坂ポケットパーク（東乙原） |
| 12. 柳町歴史的水路（柳町） | 29. 門前たてまち（立町） |
| 13. 中河原公園（尾崎町） | 30. 相生中山ポケットパーク（相生字中山） |
| 14. 櫛広場、島谷流水プール（上愛宕町） | 31. 博覧館前整備（柳町） |
| 15. 城山遊歩道（下柳町） | 32. 枅形水屋ポケットパーク（下枅形町） |
| 16. 井戸端こみち（大阪町） | 33. 城南コミュニティ広場（城南町） |
| 17. 小野スポット（上小野） | |

員会に示し」(渡部一二ほか、再掲) たという。

こうして、平成9年までに、「やなか水のこみち」、「^{あんようじ}安養寺公園」、「いがわこみち」など33ものポケットパークができあがった(図6)。「基本は、外向きの観光施設という視点よりも、地域の生活環境を良くすること」(八幡町企画課『水の恵みを活かすまち』)

その中の一つ、「やなか水のこみち」は、川の流れや渦巻きを8万個の玉石によって表現した小道だ。複雑に石が敷き込まれた水辺の小道は、周囲の穏やかな環境とも溶け合い、ほっと一息つける情緒豊かな空間に仕上がっている。パーク内に掲げられているプレートには「五感に訴える空間-多様な要素や場の集合が人びとの五感を刺激し創造性を鼓舞する」という言葉も刻まれている。

建設部の可児氏によると、「ポケットパークは起債事業で、国からの補助に頼らずに作りました。あるいは、県と一緒に整備した「けやき広場」や、一級河川の吉田川整備と一緒に整備していきました」という。

他にもまちの中では、先ほど紹介したような「水舟」がいくつも維持されている。

水舟の維持費用は、三分の二が行政からの補助で賄われ、あとの三分の一は自治会・町内会が負担する。清掃・管理は、そもそも自治会や町内会が自主的に行ってきた歴史があり、活動は継続されている。

水舟や水路の維持・清掃・管理を、住民が自主的に続けてきた経験が土台となり、さらに、「名水百選」に選ばれたことをきっかけとして、郡上八幡は「水のまち」というテーマのもとに独自のまちづくりを展開させていった。

水をテーマにした住民グループは、活発に活動している。

たとえば100名ほどのメンバーがいる「さつきの会」は、活動目標として「郡上八幡の恵まれた自然環境を守る」ことを掲げ、吉田川の水質保全と観光地にふさわしいまちづくりに力を入れてきた。汚染防止の啓蒙活動をしたり、川沿いに花壇やベンチを、また市街地名所には水舟を設置してきた。町の中央には「魚の館」を作るなどの活動を、行政と協力しながら取り組んできた。

「いがわと親しむ会」は、郡上八幡旧庁舎記念館の近くにある「いがわこみち」に沿って流れる用水を、地域住民の協力によって維持・管理している。川には洗い場も設けられており、人と水との接点がいくつも見られる。用水を覗くと、鯉、イワナ、アマゴなどがたくさん泳いでいた。

豊かな水資源を上手に活用し、長い間大切にしてきた経験は、「水のまち」としてのまちづくりを進めていく土台となり、新しく作られた住民グループの活動を支えていった。



やなか水のこみち

水と暮らし

「水の都」と言われる場所は、全国に数多く存在する。

だが、「水と人々とが直接に接触できるまち」は、どれほどあるだろうか。

郡上八幡を訪ね、「五感」を開いてまちを歩くと、指先で水の流れに触れ、舌で水を味わい、水の音に耳を傾けながら、美しい水の風景を眺めることができる。

郡上八幡の中には、何よりも複数の『水』との接点が発見できるのだ。

また水は、住民たちによって、多彩に活用されている。美味しい水で、酒を造る。とうふ、ウナギなど味覚の土台になる。トチの実を清流でさらして、餅やせんべいにする。染め物の過程で川の流れを使う。清流では、川魚が泳いでいる。子どもたちは川に飛び込み、泳ぐ、遊ぶ。郡上おどりの中でも、水をテーマにした演目はいくつも見られる。禅寺の庭の水琴窟から、音が聞こえてくる。

つまり、郡上八幡では、「水と暮らし」がいくつも接点を持ち、それが大切に保存され、維持されてきたのだ。こうした「水と暮らし」の関係を、長い時間、心地よく持続してきたことが郡上八幡の特質であり、このまちでしかできなかった特別な「感覚環境」を形成してきたといえるだろう。

「人と水との関わり方にはいくつかのタイプがあります。生きものとして水を見る目を持って関わっていくことで、水は生かされていく。それをただ「水道」という機能として見、水を物質として見てしまうと、水縁は少ないですね。人との多様な関係は生まれません……なぜなら、水道には空間がないからです。流れが表に出ず、土と水が触れ合わない。全部がパイプラインで終わっています。農業用水についても同様のことが起こっています」（渡部一二ほか、再掲）

渡部教授は、水が媒体となって「人と人」や「環境と人」とが結びついていく環境全体を指して、「水縁空間」と名づけている。そうした位置づけから見ると、郡上八幡は歴史的な経験を経て現在に至るまで、見事な「水縁空間」を維持・保全しながら、訪れる人に心地よい水環境を提供している「まち」だといえるのではないだろうか。

そんな郡上八幡の「これから」を考えていこうと、平成16年、渡部教授が30年ぶりにワークショップと現地調査を実施した。住民の水との関わり方が、時間を経過する中で、どのように変化してきたかが調査された。

各地区の住民に集まってもらい「水との関わり」や「現在、何が足りないのか」などを探るためのワークショップを行った。出された意見は「水路のフタを開いていきましょう」、「個人の敷地内にある井戸を、もう一度、見える形に整備していこう」といった内容だったという。

基本的には、水と暮らしを繋いできたこれまでの生き方を、これからも維持していくことについて異論はなく、揺らぐことはなかった。

「水のまち」郡上八幡の取り組みは、これからも「日々の暮らしに触れていただき、見ていただくこと。そのことが、結果として観光資源になっていく」（松島氏）という考えに沿って、自然体で続けられていくことだろう。

最後に、「感覚環境のまちづくり」の事例として郡上八幡を見るとき、このまちが、豊かな「水と暮らし」の融合した個性的なまちであることと、しっかりと押さえておくべき「まちづくり」のポイントについて、あらためて指摘しておきたい。

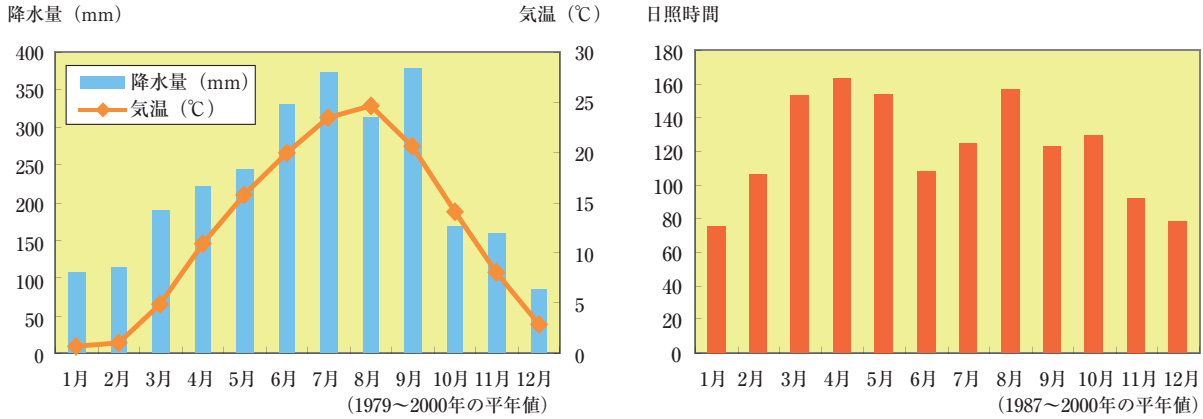
その一つは、郡上八幡の住人が、この素晴らしい水環境について、外部からの指摘を受けるまで、その豊かさに気づいていなかったという現実だ。渡部教授によって具体的な指摘を受けた後も、なかなか現実感が持てなかったという。その時、環境省によって「名水百選」に選定されたことが、「水のまち」として「まちづくり」を進めていく後押しになったという、その現実について、まず押さえておくべきだろう。

各地のまちづくりで度々指摘はされているものの、これほどまでに他のまちには存在しない豊かな環境があっても、そのまちの日常生活に溶け込んでしまうと、当事者だけではなかなか気づかない場合があるということを、郡上八幡の事例は私たちに教えてくれないだろうか。

「感覚環境のまちづくり」は、他に存在するかもしれない郡上八幡のようなまちの事例を探索しながら、感覚環境の豊かさを住民と共に発見していく「まちづくり」として、これからも展開されていく必要があるだろう。

参考資料

気温・降水量・日照時間



<気象庁データより作成>

大気状況

測定の実施なし

水質状況

生物化学的酸素要求量 (BOD・mg/l) 年75%値

	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19
長良川・上万場橋 (白鳥)	-	-	-	-	1.1	0.5	<0.5	1.0	1.0	0.6
栗巣川 (大和)	-	-	-	-	0.7	0.8	0.5	1.0	1.2	0.6
吉田川・小久須見橋 (明宝)	-	-	-	-	0.6	0.7	<0.5	0.9	1.1	0.8
小駄良川・清水橋 (八幡)	-	-	-	-	0.9	0.5	<0.5	0.8	0.9	0.6
粥川 (美並)	-	-	-	-	0.6	0.5	<0.5	<0.5	0.6	0.5

H14以前の集計データなし

<郡上市市民環境部環境課>

公害苦情

(件数)

	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19
大気汚染	-	-	-	-	-	-	-	3	2	3
水質汚濁	-	-	-	-	-	-	-	0	0	0
騒音	-	-	-	-	-	-	-	11	4	6
振動	-	-	-	-	-	-	-	0	0	0
悪臭	-	-	-	-	-	-	-	14	14	23
土壌汚染	-	-	-	-	-	-	-	0	0	0
地盤沈下	-	-	-	-	-	-	-	0	0	0
その他	-	-	-	-	-	-	-	3	2	4
総数	-	-	-	-	-	-	-	31	22	36

合併以前のデータなし

<郡上市市民環境部環境課>